友人諸兄姉　　平成22年6月15日

北田　泰治

『台湾北部見聞録』

平成22年5月12日から3泊4日で、野牛の仲間6人と台湾に行ってきた。

今回も「安・近・短」、　全食事付き29,800円の旅であった。これはその見聞録である。

1. 北部地方の観光

今回のツアーは、外国人観光客にはまだなじみの薄い、台北郊外の北部地方を巡る旅だった。総督府、中正紀念館、忠烈祠、故宮博物院といった定番のコースに飽いたリピーターをターゲットに、新たに開発された観光コースである。緑したたる山間部を通って、太平洋岸沿いに基隆、野柳を経て淡水に至る“知られざる戦前の台湾”を味わう、自然とノスタルジックに満ちたルートである。

(1)天燈上げ

台湾の原風景が残る“十分”という田舎の村で、“天燈上げ”という伝統行事を体験した。直径1mほどの

紙風船に願い事を書いて、天空に放つというたわいのない遊び（神事？）に過ぎないが、古い家並みと素朴な村人に囲まれると、なぜか童心に帰ったような気分になる。 われわれも野牛の会の発展と、会員の幸運及び健康を祈願して、2個の天燈を天空に放った。野牛の会にとって、今年はよい年になるだろう。

ここから平渓線というローカル鉄道で、十分駅から渓谷や田園風景を眺めながら“瑞芳”という町に移動した。

この路線は、九州筑豊や北海道空知のような炭鉱路線だったが、日本と同様閉山となった。今は沿線にそのような産業はない。かつてはSLが走っていたが、さすがに今は日本製のディーゼル車である。

乗車時間わずか30分だったが、のんびり出来てなかなかよい体験である。

瑞芳は、清代に金瓜石や*九份*で金鉱が発見されてから、鉱山の補給基地として飛躍的な発展を遂げた。

基隆河上流に位置する町で、駅前には賑やかな商店街があって、このあたりの中心都市のようだ。

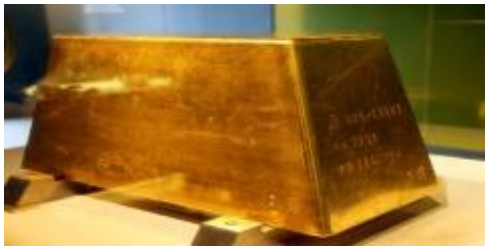
ここは、映画「非情城市」で脚光を浴びるようになった*九份*と金山跡として有名な金瓜石への入口になっている。

瑞芳駅は台湾北部のターミナル駅でもあり、東海岸を走る宣蘭線に乗れば花蓮に行くことが出来る。

50周年旅行の時は、逆コースで台北まで乗ったが、この駅のことは覚えていない。

(2)220Kgの金塊

ここから金瓜石に行った。金山の跡地は、政府が「黄金博物園区」として整備し、鉱山の歴史や文化遺産、それに環境保全を活かしたエコ・ミュージアムとして、2000年にオープンした。この中に「黄金博物館」や日本統治時代の建物などが残っている。目玉は「黄金博物館」に展示されている220kgという巨大な金のインゴットだ。来訪者は手で触ることができる。小生も金運を願って触ってみた。



敷地内には、黄金神社や二宮尊徳像、労働者の住居になっていた長屋など木造の日本家屋が残っている。

まるで明治村に来た錯覚に襲われる。中でも「太子賓館」と呼ばれている建物は、

大正時代の伝統的な品格のある木造家屋である。大正12年、昭和天皇が皇太子の時、ここを訪れた。

それを記念して田中貴金属が寄贈した建物だそうだ。

台湾は日本の統治下にあったため、物心両面でその影響がいろいろな分野にいまだに色濃く残っている。ここなどはまさに日本の文化遺産の保護地区とでも称すべきところである。ここまで日本を前面に出されると、こそばゆい思いがしないわけではない。中国とは大きな違いだ。

(3) レトロな街　“*九份*”

この近くに*九份*がある。金瓜石はまだそれほど知られていないが、*九份*は今や台湾を代表する観光スポットになり、一躍脚光を浴びる存在となった。それは映画「非情城市」の舞台になったことと、宮崎駿監督のアニメ映画『千と千尋の神隠し』のモデルになった街として紹介されたことによる。 ここは元々寒村であった。*九份*とは“９人分”という意味である。かつては9戸だけの集落にすぎなかった。

それが金鉱の発見によるゴールドラッシュで人口が急増した。急斜面の両側に土産物店と洒落た喫茶店が軒を連ねている。ちょうど江ノ島の土産物通りを思わせる。道幅が狭く急坂なのでシニアにはいささかつらい道である。

登りきると眺望が一気に開ける。眼下に紺碧の太平洋を眺めることが出来る。絶景である。この景色を見ながら郷土料理を食した。味はお世辞にも美味いとは言えなかった。

今回の旅は、“**台湾北部トク盛４日間**”と銘打ったツアーである。この名の通り、盛りだくさんの

予定が組まれ　ていて、フリータイムはおろか息つく暇もない。*九份*でも同じで、

ゆっくり土産物屋を覗くこともまま　ならなかった。そんな中、気になった店を2軒ほど覗いてみた。

１軒は女性の陶芸家が自作を展示販売している店だった。この陶芸家は、猫をモチーフにしていて、

猫をあしらった陶器が所狭しと飾ってあった。小生は猫に興味はないので、

アンティークがないか店内を見て回った。１階の飾り棚の下に埃をかぶった数枚の古い皿があった。

これは売り物かと聞いたら、そうではないという。彼女が作陶のために集めた非売品だった。

もう1軒は、いかにもそれらしい雰囲気のある「*九份*茶坊」という茶芸館だった。

本業はお茶屋さんだが、得てしてこういう店に名品、掘り出し物がある。なんと言っても内装がすばらしい。

店員によれば百年以上の歴史があるという。当時のままの黒い石壁が残っていて重厚な感じがある。

お茶屋さん だけあって、陶器は茶器が中心である。

その中で、店員からひとつの急須を薦められた。現代の名工といわれる人の作だという。腹に繊細な風景画が描かれた小ぶりの急須である。確かにすばらしい。台湾には優れた茶器が多い。わが家にも駐在員時代、

龍山寺の夜店で買ったアンティークの急須などがある。お目当ては皿だったのと、

値段が3万円だというので諦めた。

地下には茶器以外の陶器や絵画が陳列されていた。現代の作家による作品が中心で、骨董品はなかった。いずれもすぐれた作品だった。その中に、この店のオーナーの作品もあった。店員によれば、オーナーは洪志勝という画家だそうだ。名刺にはその画家が画いた風景画が印刷してあった。

（4） 奇岩・怪石の “野柳”

この後、基隆を経て奇岩・怪石で有名な“野柳”に行った。波の浸食と潮風で岩が削られ、茸や人の頭、象や亀に似た奇岩が延々と続いている。一番人気は“女王頭”と呼ばれる横顔がクレオパトラに似た岩である。

大勢の人が入れ替わり立ち替わり、女王様と並んで写真を撮っていた。

小生が駐在していた頃、歌林のスタッフに誘われて、ここの海水浴場に家族ぐるみで海水浴にきたことがある。

当時、海岸線の多くは軍事上の理由で立ち入り禁止になっていた。野柳は数少ない海水浴場だった。

その頃にはなかった「海洋生態博物館」と「シーワールド」が出来ていた。

大勢の中国人観光客がバスを連ねて訪れていた。

（5） テレサ・テンの墓

野柳から北部海岸を北上し“金寶山”に行った。テレサ・テンの墓を見るのが目的だった。これはとてつもなくでかい墓地だった。総面積が2．6ヘクタールで、入口に「鄧麗君紀念公園（略称、鄧園）」という大理石の標識が立っている。

この奥に彼女の墓地（100坪）がある。銅像や大理石のピアノ、彼女の顔を刻印した石碑や楽譜など各種のモニューメ ントが飾ってある。大理石の鍵盤からは、彼女のヒット曲が流れている。

台湾人は中国古来の占いである「風水」を信じている。テレサ・テンの遺族も風水師のおつげにしたがい、この地を墓地に選んだそ

うだ。多くの要人や経済界の重鎮、お金持ちがここに墓を設けている。墓地というより別荘が並んでいるような風景だ。なかでも、テレサ・テンの墓「鄧園」はもっとも華やかである。鄧園の位置は東北向きで、眼下に太平洋を望み、風光明媚なところにある。

(6)史跡 “紅毛城”

(7)北部観光の締めくくりは淡水だった。ここでは「紅毛城」というスペイン人が築いた城を見た。17世紀初頭、台湾に目をつけたスペイン人が淡水に侵入し、淡水河口の丘の上に、サント・ドミニカ城を建設した。スペイン人を撃退したオランダ人は、その城跡により堅固な城砦を築いた。当時の台湾住民は、西洋人を紅毛と称したことから紅毛城と呼ばれた。

その後幾多の変遷を経て、イギリス政府に租借され、領事館として使用された。現在保存されている紅毛城は、イギリス領事館だったころのもので、当時の調度品が展示されている。台湾に現存する最古の西洋建築であることから、“国家一級古跡”に指定されている。

淡水には、“淡水ゴルフクラブ”という名門コースがある。陳清波はじめ呂良換、謝敏男、郭吉雄など有名なプロゴルファーを輩出した。徐阿玉もここの出身である。小生もここには何度も来たが、ゴルフの後、北投温泉で打ち上げをやるのが定番コースだったので、紅毛城はおろか市街地もろくに見たことがない。こんな歴史的な西洋館があるとは、今まで知らなかった。

かくして、今回の本命コースである北部めぐりは終わった。翌日は、市内観光だったが、これは語り尽くしたので割愛する。

ただ、ちょっとしたエピソードを番外編として付け加えたい。

2日目の朝、早起きして安西君と散歩に出た。総督府の近くにある“二二八和平公園”という大きな公園に行った。この中に「台北二二八紀念館」がある。二二八事件は、1947年2月28日、国民党政府の横暴に対し、民衆が蜂起した事件である。これは政府によって鎮圧された。しかし、台湾人の心に大きな爪跡を残した。後で述べるガイドの蔡さんが反国民党なのは、

この事件が引っかかっているからだろう。ホテルへの帰り道、歌林の本社を見つけた。だ実在しているのを知ってうれしかった。

3日目の朝、今度はひとりでヒルトンホテルを見に出かけた。当時ヒルトンは、台北駅前にそびえたつシンボル的高級ホテルだった。宿から5分もあれば辿り着けると思っていた。ところが、記憶にある場所にそれらしい建物が見当たらない。朝食の時間までに戻らなければならない。諦めかけた。

たまたま通りかかった中年の男性がいたので、声を掛け地

図を示して聞いてみた。彼はそこまで案内するといってホテルの入口まで連れていってくれた。道すがら片言の中国語と日本語で聞いたところ、清掃局の職員で出勤途中とのことだった。職場に遅れないかと気になったが、台湾人の親切心に触れうれしかった。

ヒルトンは「シェラトン・ヒルトン」と名前を変え、以前の場所から移動していた。ロビーに入ってひと回りした。ウインドウに唐三彩の土偶が飾ってあった。写真に収めた。さすがに高級ホテルだけあって、広々とした重厚なロビーだった。盛装したドアマンに見送られ、宿泊客然として帰ってきた。

1. **シャンプーと足裏マッサージ** このツアーのもうひとつの目玉は、シャンプーと足裏マッサージだった。シャンプーとは、美容院に行って、頭を洗い、マッサージして、髪を整えるという、ただそれだけのことである。たしかに、さっぱりして気持ちがよい。ご婦人方は“使用前、使用後”で、見違えるような髪形になり、若返ったとご満悦だった。小生などは毛も少なく、代わり映えもしないので、同じ料金（600円、ツアー料金に含む）なら、せめて女性美容師にやってもらいたいと思い、店長に頼んで若い女の子にやってもらった。これが新商売として流行っているようだ。その気で見ると、確かに多い。

2.前回“檳榔小姐（ビンロウ娘）” について紹介した。ビンロウは椰子科の植物で、これを咬むと脳に刺激を与え酩酊感があることから、特にドライバーに愛好されてきた伝統的な嗜好品である。昔は、リヤカーに積んでオジサン、

オバサンが売って歩いていた。

それを現代風にアレンジしてニュービジネスに仕立て上げた。派手な電飾に囲まれたガラス張りのブースに、肌もあらわな若い女の子を立たせ、ドライバーの目を惹き付けて売るという商売を編み出した。これが“檳榔小姐” である。風紀上よろしくないということで、大都市では規制されるようになった。

こういう“風俗産業”は、なぜか南が発祥地といわれている。南部人にはこういう才覚があるらしい。シャンプーも南部人が考えたビジネスではないか、というのが、頭を洗ってもらっている最中によぎったことだ。南部人発想のビジネスには共通項がある。それは生理的な刺激に訴えるということだ。危うさというか、いかがわしさが潜んでいる。シャンプーが文字通り、洗髪、整髪であれば、南部人の発想ではないことになる。

足裏マッサージは、アジアではポピュラーな商売である。全身マッサージに比べると、料金も安く手軽である。小生はマッサージの愛好家なので、海外旅行の際は必ずやってもらう。マッサージ師は多種多様である。基本的には資格を持ったものがやるが、なかにはいかがわしいものもいないわけではない。

今回案内された施療院は、「滋和堂中医聯合診所」というれっきとした漢方医療の診療所だった。マッサージ師も全員が資格を持った医師だった。

これははじめての経験である。まさか医者に足裏マッサージをしてもらうとは予想もしていなかった。一般的なマッサージは揉みほぐすことが中心であるが、ここは医者だけあって、痛みのある場所から病状や体質を指摘し、診断と処方までしてくれる。これはなかなかよいオプションだ。

3. 食は台湾にあり

なにはさておき“食在台湾”である。今回は小籠包で有名な“鼎泰豊”と台湾料理の老舗“梅子”に行けるというので、楽しみにしていた。結論を言えば、期待外れだった。

鼎泰豊の小籠包は、その名にたがわず美味かった。その他の料理も今回訪れたレストランの中では、秀逸であった。残念だったのは、せっかくの美味しい料理をゆっくり味わう時間的な余裕がなかったことだ。まるでコンベアで運ばれてくるように、間髪をおかず次々と料理が運ばれてくる。遅れてはならじ、とただひたすら食べるしかなかった。団欒するいとまもないまま、あっと言う間に終わってしまった。

人気店が客をさばく方法として編み出した効率経営とは思うが、これではレストランの基本であるくつろぎの場をないがしろにしている。味さえよければ客は来る、といった驕りがあるのではないか。いずれ手痛いしっぺ返しがくるに違いない。

梅子は、青葉、欣葉と並んで三大台湾料理店と呼ばれてきた。台湾料理はその名の如く、台湾で生まれた家庭料理である。いわゆる中華料理の範疇には入らない。大衆料理として、台湾では根強い人気がある。味はまろやかで誰にでも親しめる。

駐在員の頃、日本からの出張者には、先ず台湾料理屋に連れて行くことを慣わしにしていた。中華料理をいきなり食べると、腹を壊すので、口慣らしを兼ねてのことだった。梅子はシンガポールにもある。シンガポールでも同じようにしていた。

その意味では、なつかしい店である。味は往時と比べ明らかに落ちていた。この原因は分らない。ツアー料金が安かったためとは思えない。台湾料理の代表格は、豚肉の角煮である。醤油をベースに時間をかけじっくりと煮込んだものだ。どこの店にもある定番料理である。今回もこれが出たが味は今一だった。かくして、ふたつの有名店は、期待外れに終わった。

しかし、初日の晩に立ち寄った名もない大衆食堂は安くて美味かった。蒸し餃子、小籠包、シュウマイなど名前の分かる料理の他に、店頭に並んでいる野菜炒めなど“小菜“を指で示し、手当たり次第注文した。

仕上げはワンタンメンだった。よく冷えた瓶ビールもうまかった。店主夫妻や居合わせた台湾人の来客とも言葉を交わしながら、わいわいがやがや言いたいことを言って、たらふく食べ飲んだ。仲間内での食事はこうありたい。みんな大満足だった。これだけ食って飲んで、料金は一人当たりなんと500円である。“食在台湾”は健在だった。

4. **北投温泉 「熱海大飯店」**

5.

最終日は、北投温泉に泊まった。北投温泉は台湾最大の温泉郷である。発見者はドイツ人だが、温泉郷の発展に尽くしたのは日本人である。このため北投温泉は、日本の温泉街に似ている。今回泊まった「熱海大飯店」も名が示すように日本式温泉ホテルである。浴衣に着替え大浴場に浸かった。

野牛の会10周年記念旅行の時も、ここにあった「別有天大飯店」に泊まった。翌朝5時に起きて、みんなで周辺を散策した。野天風呂の入口で、1番風呂に入る人達が列を作っていた。公園では太極拳をやっていた。ウォーキング中の女性から“ニー・ツァオ”と挨拶された。このさりげなさが実にいい。番台がある日本式銭湯「瀧乃湯」が、昔のまま今も営業を続けている。昭和天皇が皇太子の頃、ここで一風呂浴びたという。北投温泉は一時さびれたが、温泉ブームの到来で復活した。台湾でも人気の高い日本旅館「加賀屋」が建設中だった。年内に「北投加賀屋」をオープンさせるという。最盛期の賑わいを取り戻すのも、間もないことだろう。

5.　親日派ガイド蔡さん

ガイドの蔡天桂（中年男性）さんは、紛れもない親日派である。饒舌でしゃべり出したら止まらない。その上、甲高い声なので聞く方は疲れる。いいかげんにせんかい、と言いたくなるほどだ。それでも四六時中聞いていると耳が慣れてくるから不思議だ。

耳障りを除けば、ユーモアもあり、ガイドとしての知識も十分である。児玉源太郎、後藤新平とともに八田與一についての紹介があった。前二者はともかく、八田を知っている人はそう多くはないだろう。彼は苦難の末に灌漑用水を完成させ、不毛だった南西部の平原を穀倉地帯に変え、台湾農業の礎を築いた台湾の功労者である。李登輝が彼の生れ故郷を訪問したというエピソードをはじめて聞いた。

２日目の朝、水を買いにホテルに隣接したセブン・イレブンに行ったら、出発時間の30分前だというのに、テーブルに座っている蔡さんがいた。サンドイッチを頬張りながら、熱心に本を読んでいた。歴史書だった。ガイド中とは違う生真面目な人物だった。JTBはそんな人柄を見込んで、ガイドにしたのだろう。

親日派は反中派である。蒋介石の悪口を盛んに言っていた。こんなことは小生が住んでいた頃は考えられなかった。台湾人には心の奥に抑圧され、鬱積した感情があった。蒋経国が死んで、台湾人の李登輝が総統になった頃から、台湾人は心を解き放され、本音で話すようになったのだろう。それにしても蔡さんの反中感情はすさまじい。

現在の総統は国民党の馬英九だが、これを無能呼ばわりしていた。次期総統は民進党の蔡英文になるだろう、

とまで言っていた。彼は間違いなく民進党の支持者だ。馬総統は親中派と見られていて、

対中貿易を積極的に進めている。台中間に直行便を開設するなど、中国人観光客の誘致にも積極的だ。蔡さんは、これが気に食わない。中国人観光客のマナーの悪さをこき下ろすのも、こんな心情があるのだろう。

6.　むすび

今回の北部めぐりは、“知られざる台湾を知る”よい機会となった。なつかしさとやすらぎ、そして新鮮な感動を味わうことができた。惜しむらくは、いずれのスポットも駆け足で通りすぎたため、記憶と印象が断片的になり、互いがどういう位置関係にあるのか、よく分らなかったのではないか。小生も同様である。この見聞録は多分に後講釈である。

もしリピーターを対象にするのなら、いっそ市内観光などはやめて、３日間北部に絞った観光コースにしたらどうだろう。なにも台北市内に泊まる必要はない。基隆には観光ホテルがいくつもあるし、瑞芳や*九份*などローカル都市に泊まるのもよい。今回訪れた場所以外にも、北部にはまだまだ見所が数多くある。例えば、台湾のナイアガラと呼ばれる“十分瀑布”もそのひとつだし、北部海岸の石門、高級リゾート地の陽明山、陶器の産地鶯歌等々である。この他にも“十分”のような小さな街が点在している。基隆に泊まって、もっとゆっくりした日程で、ローカルを味わうことに徹した旅をやってみるのも悪くはない、というのが小生の感想である。

今回のツアーは、お馴染みの丸橋夫妻、安西博君、平山恵子さんの他に芦澤富雄君にも加わってもらった。

気心の知れた仲間達と、今回も楽しい旅が出来た。変らぬ友情に感謝し、またの機会を期待して筆をおく。多謝。

完